

モダニティの流動化と自爆テロ

—イストワールのなかの9.11事件とアイルランド独立蜂起—

木 原 誠

Liquid Modernity and the Suicide Terrorism:
“9.11” and “the Easter Rising” in Histire

Makoto KIHARA

要 旨

今日の「文化学」において最も注目される視点の一つに「可逆的（置換的）流動性」というものがある。この視点とは例えば、発信者（制作者）から受信者へと向かう一方通行的な文化の流れを前提とする従来型の「閉じられた」固定的視点に対し、むしろこの流れが逆流する（可逆化される）ケースにこそ注目する「開かれた」流動的視点であるとみることができる。もちろんこのような視点の転換が生まれる背景には、モダニティの拡大化に伴い文化自体がしだいに流動化され、従来型の発信者から受信者への主従的一方通行の関係がもはや成り立たなくなっているという現状認識があることはいうまでもない。この文化学的可逆的流動化の視点が歴史と物語の関係にも十分適用されるというのが本論の措定するところである。歴史と物語の語源は共にイストワールであり、本来、二つは双子の兄弟姉妹と考えることもでき、あるいは反デカルト主義者、ヴィーコに倣って、「真なるものをつくられたものは相互置換される」ものとみること十分可能であろう。だが近代的思考によって二つの間に明確な境界線が引かれ、しかも今や二つの関係性が暗黙の裡に主従・不可逆的な固定的なものとなさされているのが実情ではなかろうか。そうだとすれば、歴史と物語の関係におけるこのような近代思考に基づく前提事項は抜本的に見直してみる必要があるだろう。現代という時代は一見、現実重視、虚構軽視の傾向に向かっているかのようにみえながら、それとは裏腹に、現実自体が科学技術、マスコミ等の力を後ろ盾にして、しだいにバーチャル化され、物語（虚構）化され、その物語性が現実を変えていく事態が増大している点も看過すべきではないからである。本論では、歴史と物語におけるこの可逆的流動性を今日のグローバル自爆テロに求め、その具体的実例として9.11事件及びその原初的な現れとしてアイルランド蜂起を取り上げて考察を試みるものである。

序

演劇のなかに史劇という一つのジャンルがあるが、これを簡単に述べれば、歴史上の实在人物、事象に基づきながら、それを各作家の文学的想像力によって一つの劇的物語に仕上げるというものである。これ

は史劇を成り立たせるための最低限のルールであるとみてよかろう。つまり、史劇においては、歴史は物語に絶えず先立って存在していなければならず、この関係は逆にはならないという前提（ルール）が存在するのである。純粋に史劇を論じる場合、あるいは厳密に「閉じられたテキスト」だけを対象とする文学研究においては、このルールに従って、各々論を展開すればそれでよいのだが、「開かれたテキスト」としての「歴史」と「閉じられたテキスト」としての「文学」の関係性を視座に置いた今日の文学研究においては、この史劇のルールをそのまま前提にすることにはきわめて慎重でなければならない。というのも、元来、史劇における上述のルールは、歴史と物語の関係性全般にわたって絶えず不変的なものであるわけではなく、ときに、この関係が逆転し、物語の中の虚構のプロットが歴史に先行し、その物語にそって歴史上の事実がつくられ、現実そのものが一つの舞台と化すという、さかしまの史劇、いわば<逆史劇>というかたちが現実には起こりうる可能性が否定できないからであり、いやそればかりか、現実ですでに起こっているとみることができるからである。

逆史劇の存在、この問題は、文学研究において、(私見では) かつてほとんど真面目に取り上げられた例がない。おそらく、この問題が不問に付される最大の理由は、古典的時代の文学においては、これは「タイムマシン」の存在とほとんど同じように、理論・観念上は成立しえたとしても、現実には起こりうるはずがないと信じられていたからであろう。例えば、いかにシェイクスピアが偉大であろうと、それは彼の高い文学性、言語感覚において偉大なのであって、したがって、彼の後の歴史における社会的影響はあくまでも文学、言葉のなかにとどまるのであり、彼の作品(虚構)が直接、歴史を創造したなどといえば、それは途方もない空論でしかないと思なされているからである。この古典的文学研究の前提をなす命題は、「文学は歴史・社会・文化の反映であり、その産物である」という、(経済学でいうところの)「ファンダメンタリズム(実体中心主義)」、すなわち、「価値は実体を反映する(虚構としての物語は実体としての歴史を反映する)」というものであって、決してその逆はないと捉えられているのである。明らかに、ここには歴史と文学、事実と虚構に関する主従関係、絶対的ヒエラルキーを有する一つのパラダイムの存在がある。

だが、今日の「世界内状況」を鑑みれば、歴史と文学に関するこのファンダメンタルなパラダイムは、今や危ういものとなっていることが一見して理解されるだろう。グローバル化が進む今日、メディア、インターネット等を通じ、「世界」はますます「バーチャル・リアリティ(虚構)化」に向かっていることは誰の目にも明らかであり、今やグローバル化を促進する最大の原動力は、「虚構作用」であるとさえいえるからである。換言すれば、「実体が価値を生み出す」、あるいは「文学(虚構)は歴史の産物である」という命題は、今や現実認識に欠ける過去の一つの牧歌的「言説」になろうとしており、代わって「虚構は実体を創造し」、「(メディアやインターネット等を虚構作用によるサブカルチャーとしての文学領域にあるとみれば)歴史は文学の産物である」という途方もない逆説が現実認識に立つ新しい命題になろうとしている(この意味では、いわゆる「新歴史主義批評」の根本命題は—その批評が前提とする「歴史観」そのものが、結局のところ、典型的西洋認識法に基づく押し付けがましい異文化判断(理解)にすぎないとの「オリエンタリズム批評」からの批判を別にしても—今やもっとも危ういものになるだろう)。¹

かつて、アイルランド作家オスカー・ワイルドは「(芸術は自然を模倣するのではなく、)自然が芸術を模倣するのだ」という逆説の命題を立てて、芸術論に新風を吹き込んだことがあったが、彼のこの逆説性に比べると、上述の新しい命題はかなり控えめなものであるものの、その現実性(具体性)において、彼の命題を遥かに凌駕するものがある。イタリアの思想家、ヴィーコによれば、「自然」とは神の創造によるものであり、一方、「歴史」は人間の創造物であるという。そうだとすれば、本論における命題は、神の領域にある「自然」の問題ではなく、あくまでも人間の営為としての「歴史」の領域に踏みとどまって

いるのであり、ワイルド的命題ほどに背信的ものではないことになる。だが他方、この命題は、芸術的観念（審美性）の問題ではなく、今ここに現に起こっている歴史的・社会的事実の問題である点で、きわめて現実的視点に立つものであることになる。

このように新しい命題について、少々、長々と論じたのは、本論が対象とするテーマ、グローバル・テロリズムがこの命題を抜きにしては論じえないと考えるからである。すなわち、〈モダニティの拡大とナショナリズム〉の関係性にみられる、一つの最大の負の遺産ともいべき現代のグローバル・テロリズム、これがしばしばこの逆史劇のかたちで起こっており、しかもこの点が死角となっているために民族テロが完全に袋小路の状態に陥っている場合も少なくないと考えられるからである。本論ではこの死角に注目することによって、現代のテロリズムに対し新しい視点を提示するものである。具体的実例としてまず喚起を促したいものは、一九一六年の「アイルランド蜂起」である。この蜂起は実体（歴史）が虚構（文学的営為）によって、創造された最も典型的な例を示しており、しかも今日のように複雑化する民族テロが原初的なかたちで現れており、問題の出発点として相応しい実例となるとみるからである。ただし、蜂起の問題は、すでに別の論考（「アイルランド独立蜂起にみるナショナリズムとテロリズム—パトリック・ピアスを死へと駆り立てたものは何であったか」²）ですでに検証を試みており、本論ではそこでの検証を概略程度に説明することにとどめ、むしろ、論考の具体的対象を「9.11事件」に求めるものである。この事件と蜂起を並行させることで、民族テロの核心が歴史的相のもとで朧気ながらもその相貌を現してくると期待されるからである。

1

「歴史」と「物語」の西洋語源は共に「イストワール」であるから、語源からみれば、本来二つは根拠を同じくする双子の兄弟姉妹であるとみることもできる（二つが明確に区分されるようになったのはせいぜい十八世紀以降であり、すなわち、近代的認識法の確立をまって初めて明確に区分されるようになったとみることができる）³。むしろ、一方は現実的スタンスにより力点を置き、他方は虚構的スタンスにより力点を置くことによって当然差異が生じてくるのだが、二つは共に結局のところ人間の生の意味づけ行為、すなわち解釈行為であることに変わりはないわけだから、見かけほどにその差異は大きいものとは思われない。むしろ、デカルト的思考にアンティを投じたヴィーコの命題に倣えば、“verum=factum”、すなわち、「自然は神がつくったがゆえに真実となり、歴史は人間がつくったがゆえに真実となり」、つまりは「真実＝虚構、虚構＝真実である」ということになる。もちろん、ここでの真実と虚構、歴史と物語のイコール関係は二つが同じものであるということの意味しているわけではなく、二つは可逆的で絶えず相互補完的な表裏の関係にあること、すなわち「真実とつくられたものは互いに置換される」、とヴィーコは主張しているわけである。つまり、彼が主張するところをさらに敷衍して要点を述べれば、歴史と物語とを相互補完のもの、いふなれば二つを「合わせ鏡」として機能させることで、歴史の背後には文学的虚構性を、逆に文学的虚構性の背後には歴史的眞実を意識（うつし）しながら、人間の生としての「歴史／物語」を意味づけるべきであるということになるだろう。⁴

だが、彼が危惧したように、デカルト的思考としての近代精神は、二つのイストワールを伸違いさせ、互いは互いの鏡であるという機能を「意図的に忘却」＝隠蔽し、自己を自己によって自己規定する自閉の道に陥ってしまったとみることができまいか（先述した通り、二つが明確に区分されるようになったのは、十八世紀以降である点に注目）。彼がデカルトを激しく攻撃するのはまさにこのゆえであろう。つまり「我思うゆえに我あり」というデカルトのいわゆる「コギト」は、ひたすら自己の思惟に偏重し、他者の瞳の

なかに自己を映そうとする行為を前近代的迷信であると退けたうえで、自己は自己によって自己規定、自己認識されるという思考を生み出したとみることができよう。こうして自我はしだいに肥大化していき、この個の肥大化は西洋における近代帝国主義という自己拡大運動としての自閉の道へと続いていくことになる。このようにみると、歴史学と文学の間に境界線を引き、互いに没交渉である現代の知のあり方はいかに否定しようとも、実は西洋帝国主義運動と共謀関係にあり、すなわち、その根拠は一つであるということになるだろう。二つに超えられない境界線を設け、歴史を現実の視点から現実を、物語を虚構の視点から虚構を捉えようとするこのような近代的自閉的定義は、その思考において、他者（性）を排除し、自己を自己によって自己認識するコギトの別の表現にすぎないとみえるからである。だが、この認識のあり方はそれが依拠する西洋論理学の視点からみても誤謬であろう。なぜならば、この思考は同語反復の方法であり、同語反復は論理学、誤謬と見なされてしかるべきだからである。

この自己規定という論理的誤謬のうえに成り立つ歴史と物語との仲違いの環境設定に住まいながら、その設定を逆手にとって巧妙に虚構作用を操る近代が生み出した二つの〈モンスター〉、それが一方で近代における帝国主義、あるいは現代における「パックス・アメリカナー」としてのグローバリズムであり、他方において民族テロリズム―「テロリズム」の語源は、およそフランス革命後の「恐怖政治」に求められることから、歴史的には「テロリズム」は近代の産物とみてよいだろう―であると推測される。なぜならば、一方でグローバル化の必要性（必然性）を前提に展開される近・現代における世界の均一化の推進運動は、その多くを世界メディア、インターネットといった「ヴァーチャル・リアリティ」としての虚構作用に依存しており、他方、この虚構としてのグローバル化に包摂され、完全に劣勢に立たされた実体としての各民族の主体は、これを向かえ打つにあたり、やはり、虚構作用（メディア、インターネット）を利用せざるを得ず、これが今日のグローバル・テロリズムの特徴となっているからである（デリダはグローバル・テロを「自己免疫プロセス」による自己の破壊＝内部崩壊を意味しているとみているようだが、彼の命題は虚構作用を前提にすればさらに理解が進むであろう。なぜならば、彼がいう「自己免疫プロセス」と「テロル」の平行関係はそれ自体メタファ＝文学的虚構作用を用いて説明されているからである）。⁵つまり、グローバリゼーションと今日のテロリズムの原動力は共に実体ではなしに、虚構作用であることになる。ただし、二つの力学は表向き、共にこの虚構作用を互いの現実的政治的大義（大義は表面上「実体」を装うものである）を掲げることによって巧みに隠蔽し、「事の核心」を見えないようにしている。ここに、グローバル・テロリズムの解明を完全に袋小路に陥らせている最大の死角があるように思われる。

2

未だ記憶に新しい9.11事件は史劇における歴史と物語の関係が逆転した〈逆史劇〉の典型的一例である。この事件はある少数の者達がシナリオを作成し、それに基づいて一つの紛れもない歴史的事実が創作され、この創作品がテレビ画像を通じて生中継されることによって、世界はさながら一つの劇場と化し、ここに一つの恐怖の逆史劇が誕生したとみることができるからである。むろんこの事件に限らず、たとえばあらゆる戦争もまた予め周到なシナリオが準備され、それにそって歴史的現実がつくられていくことはいうまでもない。だが戦争一般とこの事件は明確に区別すべき必要があり、この区分はそれ自体、戦争とテロリズムの本質的差異を区分するものでさえある。

それでは戦争とテロリズムの本質的差異はどこにあるのか、それは前者の多くが政治的であるのに対し、後者、とくに現代多発する自爆テロの多くが極めて文学的であるところに求められよう。私見では現代の自爆テロに対し、現代が何の解答も用意できない最大の要因は、自爆テロのもつ不条理に満ちた文学

の側面を全く理解できず、ひたすらそれを政治的問題、しかも皮相なレベルでの政治的問題に還元して解こうとするところにあると考えるのである。この点でハーバーマスとデリダは立場を全く異にしているものの、一致してこの事件がけっして政治的問題ではなく、むしろ哲学的な問題であると述べているところは十分首肯できるものがある。しかし、(私見では)この事件は政治的問題であるよりもむしろ哲学的問題であり、哲学的問題である以上に美学・文学的領域に属する問題であるとみるのである。その根拠は、一つには9.11事件には明らかに現代の神話を創作しようとするシナリオ作家(ただし、神話創成を目論むこの作家は、本来、煽動的作品を造り上げることを第一義的な目的にしているわけだから、文学的には一流の作家とはいえず、せいぜい二流の娯楽作家とみるのが相当である)が存在すること、二点目はこれが自爆、しかもこの自爆が強制的になされた消極的なものではなく、殉教の名のもとに積極的かつ主体的に行われた自爆である点、すなわちここにおける自爆は明らかにある種のヒロイズムが存在しており、ヒロイズムは自己の美意識に直接関係するものであるがゆえに、美学、文学的領域に属する問題であるということ、以上二点に求めることができる。そこでまずは一点目から考察を試みることにする。

先述した通り、この事件のみならずあらゆる戦争にも事を起こす前には予めシナリオというものが描かれるは当然のことである。だが、戦争のために用意されたシナリオが現実の勝利のために描かれたものであるのに対し、後者はむしろ虚構のなかの演劇的「恐怖の美」の創造のためにこそ描かれたものであり、ここから二つのシナリオの決定的な差異が生じてくる。つまりこの事件は、敵対国に対する物理的ダメージを与えることに一義的目的があるわけではなく、むしろ一つの恐怖を創作し、その作品が映像化されることによって劇化し、それを観劇する観客への心理的効果、つまり演劇的效果にこそ最大の目的があったということである。9.11事件以来、多くのアメリカの作家が作品を書けなくなってしまったという事実も、このことを逆説的に裏づけるものがある。もちろん、彼らが作品を書けなくなったのは、衝撃的な現実を前にして心的トラウマが生じたというものではけっしてない。なぜならば、本来文学とは、危機的状況のなかでこそ己の存在理由を高らかに宣言することができるからである。そうではなくて、この事件が「現実が小説よりも奇なり」を体現するシナリオであること、すなわち、観客に与える演出効果のうえでこれに勝る作品はないと思われるほどに衝撃的な煽動劇に仕上がっており、しかもそれでいて現実という舞台で起こった演劇、すなわち<逆史劇>だからである(してみると、この事件によって、「作品が書けなくなった」ことが意味しているのは、先述の近代的思考=歴史と虚構の二項対立の言説が、虚構作用を問う文学においてでさえも浸透しているということ、換言すれば、文学的想像力の貧困化にあるとはいえないか)。⁷

一つの演劇が普遍的意味を獲得するためには、観客の深層心理に直接訴えかける共時的な神話構造をもたなければならない。この神話構造を成り立たせるために不可欠なものは構造の核になる表象である。この表象を核として物語は自然に意味づけられていくからである。9.11の場合、マンハッタンという現代文明の象徴的場所、そこに凱旋門のようにそびえ立つ二つの世界貿易センタービルがその表象となるだろう。この表象を通して意味づけられる神話とは明らかにバベルの塔の神話であることはいうまでもない。もちろん、この神話は旧約聖書を基とするイスラム世界とキリスト教世界が共に享受するものである。ただし、一般的にはバベルの塔の神話は人間の領分を超えて天にまで届く文明の塔を建設しようとした行為に対する神の怒りとしての塔の破壊と解されているようであるが、それだけではこの神話の理解ははなはだ不十分である。むしろ、この文明化が直接何を意味しているかが問題となる。それは「創世記」をもう少し細かく読んでいけば明らかのように、世界を一つの国家のもとにグローバル化しようとする世界最古の試みであり、その表象がアスファルト作りのバベルの塔であり、これを成立させるための不可欠の前提条件が統一言語だということである。このゆえに神は、人が一つの言語であることは良くないと仰せられ、バベ

ルの塔の破壊とともにあえて言語の混乱をもたらした。これがバベルの塔神話がいわんとするところの核心であろう。そうであるならば、いかなる意味においても“World Trade Center”は現代のバベルの塔を表象するものとなるであろう。自ら世界経済の中心と高らかに宣言することを憚らず、しかもそれは今や「国際言語」という英語においてそう名乗っているからである。もちろん、現在の世界の各国の貿易は統一的に英語が主流であるからにはこれが我田引水ではないことは明らかである。その中心に飛行機が突入し、塔は燃えさかる炎のなかで瓦解し、崩れ落ちていくところを目の当たりにすれば、もはやこれが現代のバベルの塔神話の創成であると考えない方がよほど難しいものとなる。

ただし、二つの神話の決定的違いは、一方の神話が「創世記」によれば神のシナリオによって描かれ、他方が人間のシナリオによって創られたこと、つまり、前者が（聖なる）神話であるのに対し、後者が演劇という一つの文学的虚構であり、すなわち人によって創られた歴史的現実であるということである。このシナリオづくりが神話と演劇を分けるものであるといえるが、これが虚構の文学的舞台を飛び越えて、現実の舞台になるとき、悲惨な結果を招くことになった。

だが、これを現実と虚構の相互補完性、あるいは取り違いによって誕生したとみるのは誤りである。むしろ逆に、ここにおけるテロリズムは極めて合理的に現実と虚構を二項対立のうちにもみる近代思考を前提にしてのみ起こりえるものとみるべきである。テロリズムが本質的に近代的であるという意味もここに求められる。従って、モダニティの拡大、グローバリゼーションの拡大と民族テロは表裏一体、同じ穴の貉であるとさえいってよいかと思われる。なぜならば、虚構はそれ自体が現実であると信じるものにとって、ことさらに虚構を現実化しようとする必要など全くないのであり、逆に虚構を何としてでも現実化せねばならないと考えること自体、二つに明白な境界線を設け、しかも暗黙のうちに現実が虚構に勝るという考えがあることは明らかだからである。つまりテロリストは本質的に現実と虚構の境界線を承知したうえで、文学を現実的に利用する極めて現実主義的な近代的合理主義者であるとみてよいだろう。

3

それでは二つ目の問題、すなわち9.11事件にみられる自爆性の問題を文学的視点から考えてみたい。自爆とは一つの自殺にほかならないが、『シュシュボスの神話』におけるアルベルト・カミュによれば、人は一般的に考えられるような社会的理由のために、あるいは自己とは無関係に存在する普遍的真理のために自らの命を捨てるようなことはありえない、このゆえに地動説を唱えるガリレオは自らの死が脅かされたとき、賢明にも自説を撤回したのであり、つまり自殺とは本来、極めて実存的問題、個の問題だということである。⁷したがって、彼の視点に立てば、人は政治的大義のゆえに自爆テロを起こすことなどありえないということにもなる。彼のこの視点は、9.11事件をひたす政治的問題に還元化して捉えようとする論考の盲点を鋭く突くものとなるであろう。9.11の場合、先述したように、シナリオを書いたある劇作家が存在する。しかしかにかにすぐれたシナリオが創作されようと、それを演じるに足る役者がいなければ、この劇は成り立たない。つまり、世界貿易センタービルに自己の命と引き替えに突入する者が不可欠である。しかし問題は政治的大義を掲げる役者では完全に役不足であるという点である。このことは我が国の特攻隊を例に取ればある程度理解される。特攻隊はそのほとんどが主体的に行なわれたというよりは、政治的大義とアジア的文化風習（彼らの多くは御国のために死を選択したのではなく、家族の名誉と繁栄のために死を選択せざるを得なかったとみるべきであろう）による強制された自爆、すなわち、非自殺行為とさえいえるからである。特攻隊命中率が極めて低かったのもこのことによって説明されるであろう。しかし9.11事件の場合、自己の死に一点の躊躇もない積極的自爆であるために、半ば軍人としては素人にも

等しい者たちが標的を完全に射抜いたのである。なぜか？それはここにおけるテロが政治的大義の問題ではなく、自己の生を意味づけることを可能にする宗教的信仰心に根ざしていたからであるとみるほかあるまい。しかもこの場合の宗教とは、自己と汎神論的神が緩やかに結びつくアジア的横軸の社会的関係に基づく宗教では不可能であっただろう。ユダヤ系の哲学者マルティン・ブーバーがいう意味での「我と永遠なる汝」の垂直的「応答」、すなわち個と一神教の神が絶対的垂直関係のなかで結びつくヘブライ・イスラムの宗教でなければならなかった。この垂直関係は人と聖なるものとの絶対的主・従関係のうえに成立し、しかもこの関係は、コーランと旧約聖書といずれにもみられる神への生け贄の箇所、すなわちアブラハムが我が子イサクを屠る箇所に端的に伺えるように、その信仰の本質は殉教的精神のなかにある。これが新約においては、キリストの人類救済のための十字架上の殉教＝パッションへと変容しながら西洋精神の根底に据えられるわけであるから、イスラム、西洋の世界観は共に殉教を暗黙のうちに肯定するものであるとみることができよう。もちろん、これはアジア精神のあずかり知らぬところである。そしてこの殉教精神がすぐにもヒロイズムと結びつくことは容易に察せられるところである。こうして、殉教精神を内包する信仰に個の美意識を前提とするヒロイズムが結びつき、それが文学的虚構のシナリオのなかに取り込まれるとき、ここに世界を震撼させた恐怖劇が生まれることになった。

4

このことは9.11事件をアイルランド蜂起とパラレルにみるならばさらに明らかになるであろう。そこで、ここではすでに別の論考で検証を試みた、アイルランド蜂起について概略程度述べておきたい。ただし、予め断っておくべきだろうが、この蜂起は正統なアイルランド史において、これを民族テロ、自爆テロ、ましていわんや9.11事件と並行させて捉えようとする見方などまず存在しないということである。むしろ蜂起を発端にアイルランドは一九二二年、悲願の独立を果たしたことは歴史上の事実であるから、蜂起はアイルランド史のキャンノンにおいて、いまだ誇るべき歴史的事象、独立戦争の幕開けと捉えられるべきものである。だが、本論では、この蜂起の最終的帰結としての独立については大いに尊重、歓迎するものの、その方法に問題があり、蜂起は一つの民族自爆テロの原初的現れであり、しかもその本質において9.11事件と根柢は等しいとみるのであり、その根柢を逆史劇性と殉教のヒロイズムのなかに求めたいと考えるのである。

一九一六年四月二四日、イギリスからの独立を果たすべくアイルランドの憂国の同志、急進派のナショナリストたちは武力蜂起した。世にいう「イースター蜂起」である。そのメンバーの中心はゲール語同盟のパトリック・ピアス、社会主義者ジェームズ・コノリー、急進派トマス・クラークら十六名であったが、なかでも蜂起の象徴的存在は暫定政権初代大統領ピアスであり、彼はダブリンの中央郵便局の前に立って、高らかに「アイルランド共和国宣言」文を読みあげた。その直後、中心メンバーたちは千六百人の義勇軍とともに中央郵便局を占拠し、イギリス軍と市街戦を開始、交戦は六日間続いた。義勇軍の多くはIRB（現代のIRAの前身であるが、この蜂起を境に彼らはIRA、すなわち「アイルランド共和国軍」となった）を中心とするものであった。結果は二万人に上るイギリス政府軍の圧倒的武力の前に鎮圧、降服することになった。義勇軍は軍としては素人同然の集団であり、敗北は交戦の前から明らかであり、蜂起はほとんど茶番劇の様相を呈したのである。

これで話が終わっていたとすれば、蜂起はアイルランド史においてさほど重要な事件とはならなかったはずである。しかし、これがのちに重要な意味をもつようになったのは、むしろイギリスによる蜂起の後処理の失敗にあった。イギリスは義勇軍完全降服の翌週から中心メンバー十六名全員の処刑を行った。こ

のことで眠っていたアイルランド人のナショナリズムは完全に着火し、一気に独立の気運が高まっていった。ピアスを含む処刑された十六名は国家独立のための殉教者、英雄となり、彼らの死を政治的に巧みに利用した蜂起支持派シンフェイン党は圧倒的国民の支持を得、こうして独立戦争が勃発することになった。結果、一九二二年、アルスター六州を除く南部二六州は「アイルランド自由国」として承認される運びとなったのである。

さて、この経緯だけをみると、蜂起がなぜ自爆テロと結びつくのか皆目理解できないが、まずはこの蜂起がキリストの死と復活を記念するイースターの日に決行されたという事実に注目しなければならない。蜂起の成功の鍵を握っていたのは、ドイツからの大量の武器の密輸であり、その武器をもとに一万人規模に及ぶ全国レベルでの蜂起を展開させ、戦争を長期化させることが蜂起決行の狙いであった。第一次世界大戦の最中のイギリスにとって内戦の長期化は致命的であり、やむなくアイルランドの独立を承認するだろうと彼らは踏んでいたからである。これがメンバーたちの現実的シナリオであり、このシナリオには文学的要素は含まれないとみるべきであろう。武器調達が失敗したとき計画グループの多くはこの時点で蜂起の中止、延期を考えていたことも、これが現実的な戦争のシナリオであることを根拠づけるものである。しかし、ピアスを含む十六名の中心メンバーはこれに同意せず単独で蜂起に打って出た。蜂起の最高指導者ピアスのシナリオは彼らとは違っていたからである。彼は政治家としてはほとんど素人同然であり、本来の職業は劇作家、詩人（あるいは自身で経営するゲール語学校の教師）であり、彼が他の政治に熟達したメンバーたちを尻目に最高指導者に推挙されたのは、逆説的であるが、彼が虚構作用に熟知する文学者であり、彼は半ば文学的言葉を巧みに操り支持を集めたからである。この点は看過できないところである。つまり蜂起は現実的世界の上に描かれたものではなく、芸術的虚構性の中に描かれたシナリオだったということである。ピアスにとって武器調達の問題は二次的問題にすぎなかった。彼にとってもっとも重要な点は、蜂起がメシアの死と復活を記念するイースターの日に行われることであった。この日に決行されれば、敗北は必至であり、従って自らの死は免れない。だからこそイースターの日が重要な意味をもってくるわけである。すなわち、西洋においてもっとも熱心なカトリック教徒であるアイルランド、その精神的風土においては、イースターの日殉教はメシアの死と復活の文学的意味が生じてくるのが必然的だからです。この文学的シナリオは彼の予想を上回るほどの成功裡に終わった。イギリスは彼に処刑台という最高の花道を用意してくれたからである。従って死後の彼にとっては、ただ自らの殉教者としての英雄像が自己増殖してくるのを墓場で待つだけでよかったわけである。

生前の彼はこのシナリオづくりに余念がなかった。彼は劇や詩において執拗に一人のナショナリストが国家のために殉教することの意味を説き続けた。彼の典型的な文学的調子はこうである——「そう僕は顔を向けた僕の前のこの道に。やがて目にするこの行為、この死のために。」「もしも私が死ぬのならそれは私がアイルランドにいだく愛の過剰のため」「聖母マリア様、あなたはご覧になった、はじめての息子イエス様が人々の嘲笑の中で死んでいくのを、でもまもなく私もあなたと喜びを分かちあうことになります。」劇作家である彼は自己殉教の文学的予言が現実の舞台で実際に行われた際の文学的意味の変貌を完全に見抜いていたのである。こうしてイースター蜂起は本質的に文学的虚構においてなされた。だが同時にこれは紛れもなく歴史的現実なのである。だからこそ詩人イエイツがいうように蜂起は“terrible beauty is born”「恐怖の美が誕生したのだ」、ということになる。この詩句における形容詞と名詞を裏返しにすれば、“beautiful terror (terrorism) is born”というテロリズムを暗示するものとなっている点は注目すべきである。

註

本論は2006年7月東北大学で開催された第六回日本国際文化学会全国大会における共通セッション8「表題：モダニティの拡大とナショナリズム」での口頭発表、「モダニティの流動化と自爆テロ」を論文調に改め、加筆修正したものである。

- 1 この意味では新しい文学批評と目される「新歴史主義批評」として、「文学は歴史・文化・社会の反映であり、その産物」であるという前提を暗黙の裡に承認し、これを前提・基準に文学批評を試みているとすれば、いまだ古典的で素朴な「ファンダメンタリズム」の範疇から一歩も抜け出していないことになる（そうでないとなれば、新歴史主義は、一方で「歴史は創られたものである」というヴィーコの命題を認めつつも、他方において、実証主義的視点（歴史のもつ事実性）に立って、「それ、すなわち、あらゆる言説は歴史的事実においては幻想にすぎない」と他者のつくりあげた「歴史」の欺瞞性を暴き出し、そのことで歴史のもつ虚構性を（彼らが主張する歴史の事実性によって）遮断・否定・排除する、この自己矛盾をどのように論理的に説明できるだろうか。かつて、アイルランドの作家オスカー・ワイルドは、「（芸術が自然を模倣するのではなく）自然が芸術を模倣するのである」という逆説の命題を立てたことがあったが、ヴィーコの命題を敷衍する新しい命題、「歴史・文化・社会は文学（虚構）の産物である」は、ワイルドの命題より、遙かに控えめであるが、現実性をもっている。なぜならば、ヴィーコによれば、「自然は神の産物」であるが、「歴史は人の産物にすぎない」からである。マルクスは周知の通り、ヴィーコの「真実はつくられたものである」という命題に大いに影響を受け、これを自身の歴史哲学＝「歴史はつくられたものである」に敷衍しているわけだが、しかし、「歴史と虚構は相互に置換される」というもう一つのヴィーコの命題に関しては保留しており、新マルクス主義としての新歴史主義批評もここまで踏み込んで歴史を抜本的に修正しているわけではない。むしろ皮肉にも、事実としての歴史と虚構の主従関係、絶対的序列関係、不可逆性を、これまで以上に「父権的」に押し進めている観さえある（「それは歴史的事実としては幻想にすぎない」という彼らの実証主義に基づく批判的常套句に端的に見受けられる、「幻想＝虚構」に対する自己の歴史観だけは相対化しようとしなく、著しい父権的見解は、虚構に対する不理解性の何よりの根拠となるだろう。しかも、新歴史主義批評の矛盾はこれにとどまらない。すなわち、彼らがいうところの「歴史」とは、結局、西洋的理念（歴史観）を前提としているわけだから、これを直ちに植民地文学批評に応用しようとする自体、いわゆる「（デリダ的）脱構築主義」の立場からすれば、いかにも西洋中心主義（ロゴセントリック）の押しつけということになるはずだが、奇妙なことに、新歴史主義を標榜する批評家のなかには自己を脱構築主義批評、あるいはオリエンタリズムと平行関係にあり、共同戦線を組んで「解放」を押し進めていると誤解している節があり、結果、完全に論理的自己矛盾に陥っているといわざるを得ない点が散見される。
- 2 田村栄子編『ヨーロッパ文化と日本—モデルネの国際文化学』（昭和堂、2006年）木原誠「アイルランド独立蜂起にみるナショナリズムとテロリズム」47～73頁参照。
- 3 イストワールについての考察は、ノースロップ・フライ著、高柳俊一訳『神話とメタファー』（法政大学出版、2004年）2～20参照。拙著「合わせ鏡に＜世界＞をうつす新しい学」『歴史と虚構（イストワール）のなかの＜ヨーロッパ＞』木原誠・相野毅・吉岡剛彦編（昭和堂、2007年）1～27頁参照。
- 4 ジャンバッティスタ・ヴィーコ『イタリア人の太古の知恵』（法政大学出版、1988年）参照。
- 5 デリダは「自己免疫プロセス」のメタファーによって、テロルを巧みに説明している——「その無慈悲な法とは、あらゆる自己免疫プロセスを統御する法のことです。周知のように、自己免疫プロセスとは、生ける存在者（生物）がみずから、ほとんど自殺のごとき仕方で、自己自身の防御作用を破壊するよう働く、すなわち自己自身を守る免疫に対する免疫を、みずからに与えるように働く、あの奇妙な作用のことです」ユルゲン・ハーバーマス、ジャック・デリダ、ジェヴァンナ・ボッラドリー 藤本一勇、澤里岳史訳『テロルの時代と哲学の使命』（岩波、2004年）141頁。
- 6 テロを個人の手に帰し、標的を明確化しようとするのは近代的思考の一つの癖であるが、この癖のためにかえってテロの核心は不問に付されることが多い。だが、テロリストは標的にされ、名指されることを実は好んでいるという事実を忘れるべきではない。彼らがテロを起こした場合、あえて声明文を出すのはこのためである。テロリストを名指し、それに宣戦布告することは、ハーバーマスがいうとおり、テロを戦争に格上げする行為であり、テロに大義を与えることに等しいのである。プッシュ政権は、テロの標的を外部に求め、それを「悪の枢軸」と呼ぶことで、テロを戦争に格上げし、これにより内政悪化の責任をうまく逸らし、一時期、国内の人気を博すことに成功した。そうだとすれば、グローバリゼーション（ボックス・アメリカナー）とテロリズムは持ちつ持たれつの秘密裡の同盟を結んでいることになり（現在では9.11事件は「アメリカの陰謀＝自作自演」であったとの憶測さえなされている）、つまりは、二つは利害関係を一にする同業者であるとさえいえる（一つの事件が起こった場合、通常、首謀者の特定は、そのことによって最終的に得をしたのは誰であったかによって理解される場合が多いが、この点からみると、当時、もっとも得をしたのはグローバル化を勧めるアメリカとグローバル・テロリストである）。このことによって（当時）利害を得たのは二つのもので

あり、逆にその付けを支払っているのが、世界全体であることは明白である。

- 7 ハーバーマス、デリダ参照。
- 8 そうだとすれば、この事件によって、「作品が書けなくなった」ことが意味しているのは、プロットは劇的なものであればあるほどよいという誤った文学観が存在しているのでもなければ（「現実が小説よりも奇なり」というが、本来、小説は奇である必要はまったくないのであり、むしろ、日常のありふれた現実がいかに驚きに満ちた奇なるものであるか—生はそれ自体驚きに満ちた奇跡の中の奇跡であり、小説の素材は惰性・惰眠から目を覚ましさえすれば日々無限に見出せることはいうまでもない—を現実を「異化」することによって気づかせることに力点があるはずだ）、先述の近代的思考＝歴史と虚構の二項対立とその主従関係・不可逆性の言説が、虚構作用を問う文学においてさえも浸透しているということ、換言すれば、文学的想像力の絶望的貧困化にあるとはいえないか。